

日本語学校に通う学生が活用している 進路サポート源と理想とする教師

村 越 彩

はじめに

日本語学校は日本語の学習を主な目的として来日する外国人を対象に日本語教育を行なう機関であると同時に、多くの進学者を輩出する進学予備教育機関である。昨今、日本語学校の教師⁽¹⁾には「学習者の人生を見据えた言語教育」(奥田 2011)、「将来に希望を持って生きようとする学習者の思いに応える」(萩原・高井 2011)、「日本語習得後の将来が思い描けるような進路サポートを行なう」(村越 2011)等、日本語習得に限らない教育支援を学生⁽²⁾に提供することが期待されている。

このような現状があるものの、日本語学校では学生に日本語を学ぶ意味と進路を問うことを意識化させる教育支援についてあまり言及してこなかった⁽³⁾。そこで、本研究は日本語学校に通う学生が進路選択の際に活用しているサポート源(以下、進路サポート源)並びに、その際に理想とする教師について検討することにする。ここでいうサポート源とは人にサポートを与える環境、つまりサポートを与える側の人、あるいは組織やコミュニティ(榎本 2007)のことである。

1 問題の所在と研究目的

日本語学校に通う学生の卒業後の進路は大学院・大学・専門学校への進学、就職、帰国等様々であるが、いずれの進路を選択する場合でも学生自らが積極的に取り組んでいく必要がある。しかしながら、学生が外国である日本において進路選択を行なう場合には進学や就職活動の仕方、それに伴う手続きの進め方の違いという制度面の困難に直面するとともに、受験の結果によっては新たな在留資格が得られないという特有の心理面の不安も抱いている(加賀美 1994)ことから、自らの力のみで取り組んでいくことは難しい。

進路選択上の困難を克服するには自助努力もさることながら、周囲からのサポートが欠かせない。しかしながら、学生は来日により母国での人間関係の喪失(中井 2009)を経験しており、日本で得ることができるサポート源は限られる。岡・深田(1994)は大学・専門学校・日本語学校に通う中国人学生を対象に日本人の親友がいるかどうかを尋ねたところ、日本語学校に通う学生は大学・専門学校に通う学生と比較して日本人の親友が有意に少ないことを明らかにした。また、伊能(2004)は学生が日本語学校の教職員以外の日本人と知り合う機会が少ないことを指摘している。さらに、中国人学生をサポート源の実態調査を行なった邱・久保(2008)は中国人学生が日本語学校の教職員による勉強面と生活面のサポートを必要としていることを明らかにした。以上の研究から、日本語学校に通

う学生は日本人との交流が制限される場合が多いため、ホスト国側のサポート源として日本語学校の教職員を選んでいる可能性が示された。

日本語学校に通う学生がどのような進路サポート源を活用しているかについては管見の限り明らかではない。しかしながら、金光・鳥光（2008）は学生が進学先を選択する場合は教師の助言が必須であると報告している。また、邱・久保（2008）は学生が進路選択の際に教師による日本語指導や専門知識を必要とし、日本語学校の友人との助け合いが困難である可能性を指摘している。以上の報告・研究から、他の場面同様に教師は学生にとって重要な進路サポート源であると推測される。

それでは、日本語学校においてどのような進路サポートが行われているのだろうか。ここでいう進路サポートとは進路指導室や相談室において行われる進路指導や相談のみならず、必要に応じて行われている進路選択に関わるサポート（村越 2011）を指す。市嶋・長嶺（2008）は進路に関するレポートを書くことにより、内省が生じ、進学動機が明確になることを事例研究から明らかにした。遠藤・佐藤（2008）は大学院進学希望者を対象とした進学クラスの試みから、進学予備教育の転換の必要性並びに、クラスメートとの対話を通じた進学動機の自覚化の必要性について述べた。また、村越（2011）は日本語学校に通う学生が教職員から受け取った進路サポートが進路選択自己効力⁽⁴⁾にどのような影響を及ぼすかを明らかにすることを目的とし、中国人学生 207 名、韓国学生 212 名を対象に質問紙調査を行った。その結果、両国の学生に共通して「心理・指導サポート」、「基本的情報サポート」がある場合、進路選択自己効力が高まることを明らかにした。このように様々な形式による進路サポートが行なわれている日本語学校がある一方で、専門の教職員が十分に配置されていなかったり、進路サポートシステムが構築されていなかったりする日本語学校もある。範（2005）は進学先を探す際に誰にも相談できなかった学生や、成績表を見て進学先を勝手に決める教師に不満を持つ学生について報告している。以上の研究から、日本語学校では教職員、特に教師を中心に授業内外において進路サポートが行われているものの、一部の学生が不満を抱いていることが示された。

以上を踏まえ、本研究は日本語学校に通う学生が活用している進路サポート源とはどのようなものか、各学生が活用している進路サポート源の比較を行なったうえで、どのような傾向が見られるかについて明らかにすることを第一目的とする。また、学生にとっての進路サポート源としての理想的な教師とはどのようなものかについて明らかにすることを第二目的とする。

2 方法

2.1 対象者

本研究では東京の日本語学校 4 校に通う在校生とその卒業生計 14 名を対象とした。中国または韓国の学生を対象者としたのは両国が日本語学校に在籍する学生の出身国上位 2 カ国であり、総学生数のおよそ 8 割を占めている（財団法人日本語教育振興協会 2010）ことから、両国の学生について把握することが重要であると考えたためである。対象者はいずれも卒業後に実際に進んだ進路に関係なく、一度は進学も考えていた。なお、入学から卒業までの一連の流れのなかにおける進路サポート源についても把握するため、卒業生も対象とした。

対象者の属性は表 1 のとおりである。国籍は中国 5 名、韓国 9 名であり、性別は男性 7 名、女性 7 名である。年齢は 10 代後半 2 名、20 代前半 6 名、20 代後半 4 名、30 代前半 2 名であり、20 代が多い。日本語学校在籍期間は 7 カ月から 1 年 9 カ月である。日本語能力は上級 9 名、中上級 4 名、中級

1名である。最終学歴は高校卒業5名、大学休学2名、大学卒業7名であり、大学卒業が最も多い。卒業後の進路は滞日12名、帰国2名である。滞日12名の内訳は専門学校進学3名、大学進学3名、大学院進学1名、就職4名、就職予定1名である。帰国2名の内訳は復学1名、就職予定1名である。

表1 対象者の属性

	国籍	性別	年代	日本語学校 在籍期間	日本語 能力	最終学歴	卒業後の進路
A	中国	男	20代前半	1年3カ月	上級	高卒	滞日/専門学校進学(日本語)
B	中国	男	20代前半	1年6カ月	上級	高卒	滞日/大学進学(経済)
C	中国	男	20代前半	1年9カ月	上級	大卒	滞日/大学院進学(経済)
D	中国	女	10代後半	1年3カ月	中上級	高卒	滞日/大学進学(グラフィックデザイン)
E	中国	女	20代前半	7カ月	中上級	大卒	滞日/就職(営業)
F	韓国	男	20代後半	1年6カ月	中上級	高卒	滞日/専門学校進学(デザイン)
G	韓国	男	30代前半	1年	中級	大卒	滞日/就職予定(プログラミング)
H	韓国	男	20代前半	11カ月	上級	大休	帰国/復学(経済)
I	韓国	男	30代前半	1年8カ月	中上級	大卒	滞日/就職(医療関係)
J	韓国	女	20代前半	2年	上級	大休	滞日/大学進学(国際関係)
K	韓国	女	20代後半	1年6カ月	上級	大卒	滞日/就職(服飾デザイン)
L	韓国	女	20代後半	1年	上級	大卒	滞日/専門学校進学(翻訳)
M	韓国	女	10代後半	11カ月	上級	高卒	帰国/就職予定
N	韓国	女	20代後半	1年3カ月	上級	大卒	滞日/就職(会計)

2.2 調査方法・分析方法

2008年11月から2009年2月にかけて対象者14名に対して半構造化インタビューを実施した。所要時間は30分から3時間程度であった。インタビューは進路選択の際に活用または影響しているものは何かを日本語で問うものであった。また、ほとんどの対象者から教師が重要な進路サポート源であると語られたことから、進路サポート源としての理想的な教師とはどのようなものかについても問うた。進路選択の際に活用または影響しているもののうち、本稿では進路サポート源に着目して述べる。インタビューは対象者の許可を得て録音し、これを文字化したものをデータとして使用した。

分析にはKJ法(川喜田1967)を用いた。文字化したインタビューデータを1つずつカードにし、内容の類似性や関連性により、カード間の親近性を見出し、グループ化した。また、KJ法による整理、分類後に第一目的の分析として、各学生が活用している進路サポート源の比較を行ない、ケースに分類した。

3 結果と考察

3.1 日本語学校に通う学生が活用している進路サポート源

表2の上段は日本語学校に通う学生が活用している進路サポート源についての回答をKJ法により、整理、分類した結果を示している。上から順に大カテゴリー、中カテゴリー、小カテゴリーを表し、

括弧の数字は事例数を表している（複数回答）。以下，【 】は大カテゴリー，[] は中カテゴリー，括弧内は筆者の補足，アルファベットは対象者を示す。

分析の結果，【ホスト国の進路サポート源】24例，【同国の進路サポート源】14例，計2つの大カテゴリーが得られた。学生はホスト国である日本人からの進路サポートと，中国または韓国という同国人からの進路サポートを得，進路選択を行なっていることがわかる。以下，大カテゴリーごとに抽出された中カテゴリー，小カテゴリーについて述べる。

表2 日本語学校に通う学生が活用している進路サポート源とそのケース

ケース	大カテゴリー	ホスト国の進路サポート源 (24)						同国の進路サポート源 (14)										
	中カテゴリー	日本語学校の教師 (17)			友人 (5)			ボランティア (2)		友人 (8)			家族 (4)		進路に関する専門家 (2)			
	小カテゴリー 対象者	担任教師 (8)	進路担当の教師 (5)	担任以外の教師 (4)	社会人の友人 (2)	大学生の友人 (2)	恋人 (1)	希望の職業従事者 (1)	希望の職業元従事者 (1)	日本語学校の友人 (2)	大学留学生の友人 (2)	社会人の友人 (2)	恋人 (1)	ルームメイト (1)	両親 (2)	親戚 (2)	進学資料施設の担当者 (1)	希望の進学先の教師 (1)
担任教師活用	A	●	●			●				●	●						●	
	B	●	●	●							●					●		
	C	●		●								●						
	D	●	●		●											●		
	F	●		●														
	I	●							●									
	L	●			●													
他の教師活用	E		●						●									
	G		●															
	M			●											●			●
教師不活用	H				●													
	J												●	●				
	K						●	●										

3.1.1 【ホスト国の進路サポート源】

一つ目の大カテゴリーは担任教師，進路担当の教師，担任以外の教師から構成される「日本語学校の教師」17例，社会人の友人，大学生の友人，恋人から構成される「友人」5例，希望の職業従事者，希望の職業元従事者から構成される「ボランティア」2例があり，【ホスト国の進路サポート源】とした。以下にインタビューデータからの具体例を挙げながら，各カテゴリーについて説明をする。

まず，一つ目の中カテゴリーである「日本語学校の教師」について述べる。A, B, C, D, F, I, L, N はいずれも担任教師から情報や指導を得，親身になって励ましてもらったと語った。また，担任教師についてBは「お母さん」，Cは「親戚のおばさん」のように常に頼れる存在であったと語った。亀川 (2005)，範 (2005) は教師に対していつでも助けてくれる「家族」や側にいてくれる「友達」

という肯定的な認識を抱いていることを指摘しているが、進路選択の際にも様々な進路サポートが得られることから、家族のイメージを一部の学生が抱いていることがわかる。このことは担任教師が日本語学校において最もアクセスしやすい身近な存在であることを意味している。一方、E, G, Mは担任教師からは得なかったものの、進路担当の教師、担任以外の教師からは情報や指導を得、励ましてもらったと語った。つまり、担任教師を中心に活用したA, B, C, D, F, I, L, Nも、進路担当の教師、他の教師を活用したE, G, Mも複合的な進路サポートが得られることから、[日本語学校の教師]を活用していたと考えられる。

次に、二つ目の中カテゴリーである[友人]について述べる。たとえば、当初大学への進学を希望していたAは日本人大学生の友人から大学の様子を聞くことにより、大学生活に対する具体的なイメージを膨らませた。また、大学に進学するか専門学校に進学するかを悩んでいたDはグラフィックデザイナーをしている社会人の友人にその業界の現状を聞き、今後の就職も考えて大学への進学を決めた。つまり、A, D, H, K, Lは希望する進学先または就職先の生の情報を得られることから、[友人]を活用していたと考えられる。

最後に、三つ目の中カテゴリーである[ボランティア]について述べる。医療関係の大学院または企業への就職を希望していたIは医療に関する専門用語を用いた履歴書の書き方について元医療従事者である日本語ボランティアから指導を得ていた。また、服飾関係の大学を卒業し、来日していたKは日本で服飾関係の専門学校への進学または就職で迷っており、服飾デザインに携わる人にその業界の事情を聞くことにより、韓国の大学で学んだキャリアを活かすために就職することを選んだ。つまり、I, Kは特定分野に関する情報や知識を得られることから、[ボランティア]を活用していたと考えられる。

3.1.2 【同国の進路サポート源】

二つ目の大カテゴリーは日本語学校の友人、大学留学生の友人、社会人の友人、恋人、ルームメイトから構成される[友人]8例、両親、親戚から構成される[家族]4例、進学資料施設の担当者、希望の進学先の教師から構成される[進路に関する専門家]2例があり、【同国の進路サポート源】とした。以下にインタビューデータからの具体例を挙げながら、各カテゴリーについて説明をする。

まず、一つ目の中カテゴリーである[友人]について述べる。たとえば、A, Eは同じ立場の日本語学校の友人と落ち込んでいるときに励まし合ったり、情報交換をし合ったりしていた。邱・久保(2008)は進路選択の際に日本語学校の友人との助け合いが困難であることを指摘しているが、本研究では日本語学校の友人同士が助け合っていたことが示された。その一方で、Jは日本語学校の友人は関係が近すぎ、一人に話したことが噂のように学内に広がることを敬遠し、ルームメイトの存在が重要であると語った。また、A, Bは立場を理解してくれる大学留学生の友人に大学の情報を得、C, Nは社会人の友人に自分が日本で就職するうえで、外国人の自分に必要な情報を得ていた。つまり、A, B, C, E, J, Nは情報を得たり、精神的に支え合ったりできることから、同じ滞日外国人の立場である[友人]を活用していたと考えられる。

次に、二つ目の中カテゴリーである[家族]について述べる。B, Dは親戚が日本に長期にわたり住んでいることから、その立場からの意見や進学先や就職先の情報を得ていた。また、Jは主に進学費用等金銭面について、Mは進学先の選択について両親の意見を求めていた。つまり、B, Dは来日による新たな進路サポート源を活用し、長期滞日経験に基づいた進路情報を得られることから、J, M

は既存の進路サポート源を活用し、現実的な意見を得られることから、「家族」を活用していたと考えられる。

最後に、三つ目の中カテゴリーである「進路に関する専門家」について述べる。Aは来日当初、日本語初級で日本語教師への相談が困難であったことから、同国人である進学資料施設の担当者から進学情報を得、頼りにしていた。また、Mは同国人である希望の進学先の教師を日本生活の先輩として頼りにし、進学の情報も得ていた。つまり、A、Mは同国人の強みである母語を活かし、人生の先輩として「進路に関する専門家」を活用していたと考えられる。

3.2 各学生が活用している進路サポート源のケース

表2の下段は3.1で明らかになった学生が活用している進路サポート源について学生ごとに比較を行ない、ケースに分類した結果を示している。縦軸はケース名、対象者を示す。横軸は対象者A～Nそれぞれの進路サポート源を表し、黒丸は活用している進路サポート源があることを意味している。分析の結果、「担任教師活用」、「他の教師活用」、「教師不活用」に大別されることが明らかになった。以下、ケース別に述べる。

3.2.1 「担任教師活用」のケース

これは進路選択の際に【ホスト国の進路サポート源】である担任教師を主に活用していたA、B、C、D、F、I、L、Nのケースである。この背景には担任教師へのアクセスの容易さがある。たとえば、専門学校に進学したAは日本語ができなかった来日当初は同国人を中心に進路サポートを得ていたが、日本語の上達とともに毎日顔を合わせる担任教師を中心に進路サポートを得るようになった。また、Fは担任教師であるかどうかに関係なく、進路サポートが必要なときに学校にいた教師に求めていた。さらに、Iは医療関係への進学または就職を希望していたことから、一般的な進路サポートは身近な担任教師に得、専門に関わる進路サポートは希望の職業元従事者に得るというように使い分けをしていた。つまり、A、B、C、D、F、I、L、Nは担任教師を進路選択のキーパーソンとしてとらえ、それを起点として様々な進路サポート源にアクセスしていたと考えられる。

3.2.2 「他の教師活用」のケース

これは進路選択の際に主に【ホスト国の進路サポート源】である進路担当の教師または担任以外の教師を活用していたE、G、Mのケースである。この背景には担任教師が進路サポート源として機能していなかったことがある。Eは担任教師の進路サポートには必要性を感じず、進路担当の教師に指導や情報を得、日本語学校の友人に悩みを相談したりしていた。また、Gは担任教師が進路に関心を持ってくれなかったため、進路担当の教師のみを活用していた。さらに、Mは母国で進路選択をする際に教師が手助けをしてくれたことから、日本語学校でもそれを期待し、担任教師に進路サポートを求めたものの、得られなかった。そのため、Mは担任以外の教師や希望の進学先の同国人の教師に進路サポートを求めた。つまり、E、G、Mは進路選択の際に担任教師の活用が困難あるいは不要であり、その代替として他の教師を活用していたと考えられる。

3.2.3 「教師不活用」のケース

これは進路選択の際に主に【ホスト国の進路サポート源】である「日本学校の教師」不活用であっ

た H, J, K のケースである。この背景には他の進路サポート源の活用がある。H はどのように「日本語学校の教師」から進路サポートを得ればいいのかのよくわからず、復学も考えていたことから積極的に求めなかった。また、J は自分で問題解決を行ないたいという意識が強く、教師にはもともと進路サポートを期待していなかった。さらに、K は「日本語教師は日本語を教える人」であり、日本語学校の教師からは自分が期待する進路サポートを得られないと考えていたため、他の進路サポート源を活用した。つまり、H, J, K は担任教師を必要としていたかどうかに関わらず、担任教師から進路サポートを得られなくても他の進路サポート源が活用可能であったことから、教師は不活用であったと考えられる。

3.3 日本語学校に通う学生にとっての進路サポート源としての理想的な教師

図は日本語学校に通う学生にとっての進路サポート源としての理想的な教師についての回答を KJ 法により、整理、分類した結果を示している。

分析の結果、【心理援助者としての教師】、【情報提供者としての教師】、【熟達者としての教師】という3つの大カテゴリーが得られた。学生は進路選択の際に教師に多様な役割を期待していることがわかる。以下、大カテゴリーごとに抽出された中カテゴリー、小カテゴリーについて述べる。

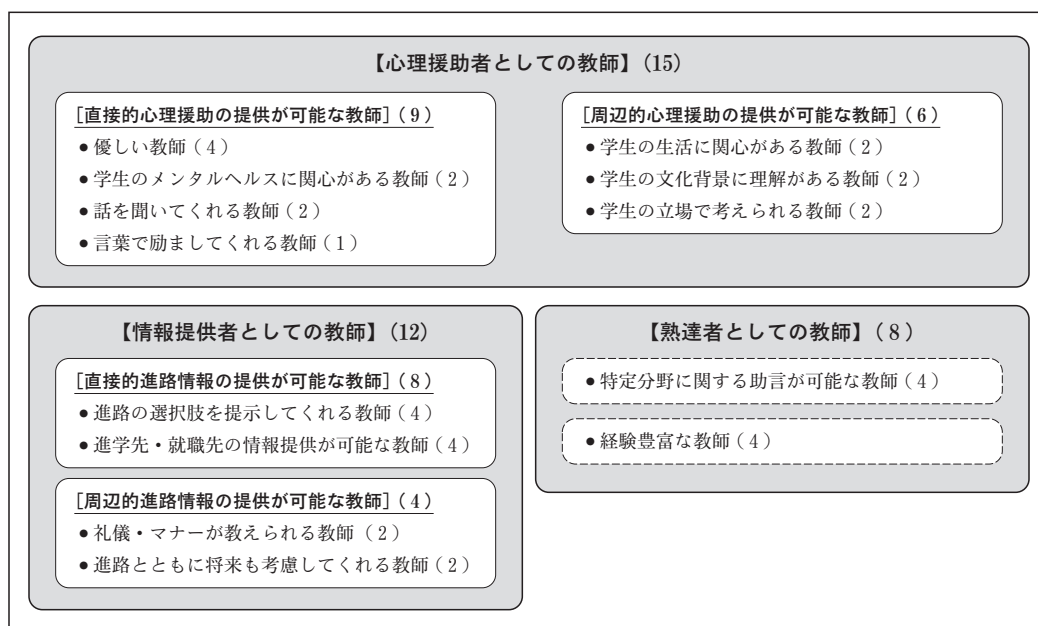


図 日本語学校に通う学生にとっての進路サポート源としての理想的な教師

3.3.1 【心理援助者としての教師】

一つ目の大カテゴリーは優しい教師、学生のメンタルヘルスに関心がある教師、話を聞いてくれる教師、言葉で励ましてくれる教師という、進路選択の際に落ち込んだり、悩んだりしたりするときに直接的に支えることを教師に期待する「直接的心理援助の提供が可能な教師」9例、学生の生活に関心がある教師、学生の文化背景に理解がある教師、学生の立場で考えられる教師という、学生が安心して進路選択に臨める環境を作ることにより、精神的に支えることを教師に期待する「周边的心理援

助の提供が可能な教師] 6例があり、【心理援助者としての教師】とした。以下にインタビューデータからの具体例を挙げながら、各カテゴリーについて説明をする。

まず、一つ目の中カテゴリーである「直接的心理援助の提供が可能な教師」について述べる。優しい教師は「厳しい両親みたいな感じではなく、友達みたいな先生」のように教師に厳しさではなく優しさを期待するというものである。学生のメンタルヘルスに関心がある教師は「先生は学生の心の健康に関心を持たなければいけない」のように学生が安心して進路選択に取り組めるようにメンタルヘルスに気を配ることを期待するものである。話を聞いてくれる教師は「言いたいことを気が済むまで言ってから、アドバイスをもらいたい」のように学生の話ゆっくり聞いてほしいというものである。言葉で励ましてくれる教師は「(進路選択に迷ったり、悩んだりしたときに)君は一人じゃないよ、何でもがんばればできるから心配しないでという言葉の力が一番役立つ」のように言葉による励ましを期待するものである。

次に、二つ目の中カテゴリーである「周辺的心理援助の提供が可能な教師」について述べる。学生の生活に関心がある教師は「私に関する質問をしてきたら、あの先生は私に関心があると思ひ、(進路に関することも)言いやすい」のように進路について話す前に教師との良好な関係を築くことを期待し、そのために自らの生活に関心を持ってもらいたいというものである。学生の文化背景に理解がある教師は「国の事情による進路への考え方の違いがわかる先生がいい」のように学生の出身国の事情を理解した進路サポートを期待するものである。学生の立場で考えられる教師は「その立場に合わせて先生たちが話すことが必要」のように学生が母国で何をしていたのか、何を専攻したのかというようなバックグラウンドを理解した進路サポートを教師に期待するものである。

このように学生が【心理援助者としての教師】を理想的な教師として求めている背景には母国で築いたサポート源へのアクセスの困難さによる、不安や心細さがあると考えられる。学生はメンタルヘルスが良好な状態で進路選択を行なうことを望み、「直接的心理援助の提供が可能な教師」を求めている。また、学生は教師との良好な関係や環境を望み、自分らしい進路を選択したいと考え、「周辺的心理援助の提供が可能な教師」を求めている。この結果は範(2005)が問題視する30分程度の面接で進路を選択させるような姿勢を学生は望んでいないという結果を支持するものである。

3.3.2 【情報提供者としての教師】

二つ目の大カテゴリーは進路の選択肢を提示してくれる教師、進学先・就職先の情報提供が可能な教師という進路選択に直接的に関わる情報提供を教師に期待する「直接的進路情報の提供が可能な教師」8例、礼儀・マナーが教えられる教師、進路とともに将来も考慮してくれる教師という進学や就職後のことも見据えた礼儀やマナーに関する情報、将来設計も含めた情報提供を教師に期待する「周辺の進路情報の提供が可能な教師」4例があり、【情報提供者としての教師】とした。以下にインタビューデータからの具体例を挙げながら、各カテゴリーについて説明をする。

まず、一つ目の中カテゴリーである「直接的進路情報の提供が可能な教師」について述べる。進路の選択肢を提示してくれる教師は「こんなメリットがありますよ、こんなデメリットがありますよという選択肢を教えてもらい、それを判断して自分で一つを選ぶ形がいい」のように学生が一人では考えられないような選択肢をいくつか提示してほしいというものである。進学先・就職先の情報提供が可能な教師は「大学の知名度によって就職に有利か不利かはあると思うので知りたい」のように自分では知ることが難しい情報の提供とともに、「学校には進学資料が足りない」ことから、資料の提供

を教師に期待するものである。

次に、二つ目の中カテゴリーである「周辺の進路情報の提供が可能な教師」の具体的な事例を見ていく。礼儀・マナーが教えられる教師は「礼儀を先生から習ったら、(就職活動も)今よりしやすい」のように進学や就職の際に役立つ礼儀やマナーを教えてほしいというものである。進路とともに将来も考慮してくれる教師は「個人が(将来)何をやりたいかによって進学するか就職するかがわかるはず、進学でも勉強して学者になりたい人は少ない(からこそ日本語学校在学時から就職も意識する必要がある)」のように卒業後の進路のみならず、将来を見据えた進路サポートを教師に期待するというものである。

このように学生が【情報提供者としての教師】を理想的な教師として求めている背景には教師による情報提供が必須であり、現状ではやや不足しているためであると考えられる。学生は進路選択の根幹に関わる進学先や就職先の情報提供を必要とし、「直接的進路情報の提供が可能な教師」を求めている。進学を希望する学生が最も困ることとして情報の不足が挙げられている(山田 2008)ことから、自分で収集困難な情報の提供を教師に求めていることが推察される。また、学生は進路決定後や将来を見据えた進路選択を望み、「周辺の進路情報の提供が可能な教師」を求めている。奥田(2011)、萩原・高井(2011)、村越(2011)において教師は将来も考慮した進路サポートを提供する必要性が指摘されたが、本研究において学生がそれを期待していることが明らかになった。

3.3.3 【熟達者としての教師】

三つ目の大カテゴリーは特定分野に関する助言が可能な教師 4 例、経験豊富な教師 4 例という進路選択の際に学生を導いていくことを教師に期待するものであり、【熟達者としての教師】とした。以下にインタビューデータからの具体例を挙げながら、各カテゴリーについて説明をする。

まず、一つ目の小カテゴリーである特定分野に関する助言が可能な教師は「私は少し経験があるから、もう少し専門的な細かいところまで教えてくれたらいいと思う」のように教師に学生の希望する特定分野への造詣の深さを期待するものである。次に、二つ目の小カテゴリーである経験豊富な教師は「経験がある人がいい、経験がない人はあまりわからないから」のように教師経験に基づいた進路サポートを期待するものである。

このように学生が【熟達者としての教師】を理想的な教師として求めている背景には一人で進路選択を行なうことの困難さ、家族との別離による進路サポート源不足があると推測される。前述したように母国から離れて進路選択を行なうには様々な困難を伴う。また、家族と離れていることから、日本で代わりに導いてくれる役割を果たす人は身近な教師になると推測される。日本語教師には語学指導者であると同時に進路選択の際にも指導的立場で学生に接することが期待されている。

4. 総合的考察

本研究では以下のことが明らかになった。第一目的に関連して日本語学校に通う学生は【ホスト国の進路サポート源】、【同国の進路サポート源】を進路サポート源として活用し、特に担任教師を活用していることが示された。また、各学生の活用している進路サポート源は「担任教師活用」、「他の教師活用」、「教師不活用」の3ケースに大別されることが示された。また、第二目的に関連して学生は【心理援助者としての教師】、【情報提供者としての教師】、【熟達者としての教師】を進路サポート源

としての理想的な教師として期待していることが示された。

以下では学生が担任教師を中心に活用していたという結果から、まず、既存の進路サポート源をどのように活用し、連携していけばいいかという視点から考察を述べる(4.1)。次に、学生は進路選択の際に教師に複合的な進路サポートを期待しているという結果から、進路選択場面においてどのようなアセスメントが必要であるかという視点から考察を述べる(4.2)。考察には職業的な援助者のみならず、家族や友人も重要な援助者と見なすヘルピングの考え方を基盤とする学校心理学(石隈 2007)の観点を援用する。

4.1 既存の進路サポート源の活用と連携の必要性

学生が担任教師を進路サポート源としてもっとも活用していたこと、各学生の活用している進路サポート源3ケースのうち、「担任教師活用」、「他の教師活用」で約8割を占めていたことは担任教師が進路選択の際のキーパーソンであることを示している。学生は進路選択の際にまず担任教師に進路サポートを求め、「担任教師活用」を模索する。日本語学校においてシステムとして担任教師に進路サポートの役割が課されている場合、学生は容易に進路サポートを求めることができる。しかしながら、担任教師へのアクセスが困難な場合、学生は「他の教師活用」を選択する。そのどちらでもない場合、学生は「教師不活用」になる。いずれのケースの場合も必要としている進路サポート源が活用できない場合には深い失望感を抱き、進路選択自体を躊躇したり、断念したりする可能性もあることから、今後はそのような学生でもアクセス可能なシステムの構築を検討する必要がある。

石隈(1996; 2007)は援助者(ヘルパー)を、援助サービスを日常の仕事の中心としている専門的ヘルパー、複合的な様々な仕事の側面として援助サービスを行なう複合的ヘルパー、役割のひとつあるいは側面として援助サービスを行なう役割的ヘルパー、職業や家族という役割とは関係なく、援助的機能を持つボランティアヘルパーに分類している。これを今回明らかになった学生が活用している進路サポート源に当てはめると、専門的ヘルパーは「日本語学校の教師」のうちの進路担当の教師、一部の担任教師、「進路に関する専門家」、複合的ヘルパーとは「日本語学校の教師」のうちの担任教師、担任以外の教師、役割的ヘルパーとは「家族」、ボランティアヘルパーとはホスト国と同国の「友人」、「ボランティア」となる。

学生が活用している既存の進路サポート源には有機的な結びつきが少なく、有効活用するためには各進路サポート源が相互補完的に結びつく進路サポートシステムの構築が必要である。進路サポートシステムの構築のためにはまず、専門的ヘルパーの役割を担える人を校内に置く必要がある。本研究で明らかになったように、日本語学校の担任教師には多重な役割が課されていること、非常勤講師には問題対処を行なうには限界があること(加賀美 2003)を考えると、専門的ヘルパーとしての進路担当の教師を確保し、学内の進路サポートシステムの整備を進めることが必要であろう。具体的には各教師の進路サポートの経験や知識を共有し、常に頼れる関係を築く必要があることから、基礎資料となるマニュアルの作成や、定期的な講習会の実施等が望まれる。また、他分野からの転職や定年退職によって日本語教師の職に就くというように、様々なバックグラウンドをもった教師が現場に増えることにより、今までに培った専門的な知識や能力を生かしたサポートの提供が可能となり、学生の進路選択に役立てることができるだろう。

また、石隈(2007)は職業的な援助者のみならず、家族や友人も重要な援助者とみなしている。本研究において教師以外の進路サポート源も機能していることが示された。このことから、積極的な役

割的ヘルパーとボランティアヘルパーの活用が望まれる。具体的には進路選択の初期段階から家族と連携を強め、日本語学校から定期的に学生の進路選択の状況を報告し、意見を求めたり、情報交換をしたりすることが考えられる。それとともに、日本語学校に卒業生や日本人大学生を招き、友人からの進路サポートが得られない一部の学生にも情報提供や交流の機会を提供したり、特定分野に対する造詣のあるボランティアの募集を行ない、必要に応じて日本語学校に招き、専門的な知識や能力に基づいた進路サポートの提供をしたりすることが考えられる。

4.2 進路選択場面におけるアセスメントの必要性

進路サポート源としての理想的な教師として【情報提供者としての教師】、【熟達者としての教師】のみならず、これまではあまり注目されてこなかった【心理援助者としての教師】を学生が期待しているという結果は心理援助の不足を意味している。[日本語学校の教師]も励ましや共感というような精神的な進路サポートを行なうことは可能であるが、学生のメンタルヘルスを考慮すると、学内の進路サポート源のアセスメントをし、必要に応じた学外の進路サポート源の活用も必要である。

進路に関するアセスメントは進路選択過程で直面する課題やそのときの危機状況に関する情報収集・分析を通して、援助方針を決め、計画を立てるために行なう(今西 2007)。これを3段階の援助サービス(石隈 1999)との関連で整理すると、一次的援助サービスはすべての学生を対象にし、進路選択に取り組む能力を促進するためのアセスメントを行なう、二次的援助サービスは一部の配慮を要する学生を対象にし、重大な問題に発展しないようにアセスメントを行なう、三次的援助サービスは進路選択過程における強い不安感や進学断念等の問題を抱える特定の学生を対象にし、個別的に状況に応じたアセスメントを行なう。

これを今回明らかになった進路サポート源としての理想的な教師に照らすと、【情報提供者としての教師】、【熟達者としての教師】、【心理援助者としての教師】は自ら積極的に進路選択に取り組めるような一次的援助サービスを提供することから、すべての学生に必要であろう。また、【熟達者としての教師】のうち、特定分野に関する助言が可能な教師や、【心理援助者としての教師】のうち、学生のメンタルヘルスに関心がある教師は今後進路選択に躊躇したり、断念したりするという事態の予防のために一部の学生に必要であろう。このように、一次的援助サービス、二次的援助サービスは学生が期待する理想的な教師と一致し、それは教師の意識、スキルの獲得によって学生に提供が可能である。

しかしながら、特定の学生を対象とした三次的援助サービスはインタビューした対象者には該当しなかった危機的状況であり、教師のみで対応するには限界があることを考えると、学外の進路サポート源の活用が必要であろう。具体的には学生が抱える進路選択の不安感、進学断念等の危機的状況に対処できる心理援助の専門家、キャリア教育の専門家の登用が考えられる。

おわりに — 今後の課題 —

以上、本研究から明らかになった結果について学校心理学の観点を援用し、考察をした。このようなメンタルヘルスに留意した、将来に関わる進路サポートを日本語学校において行なうことこそが、学生に日本で日本語を学ぶ意味、日本で進学することの意味を問い、真に目指す進路選択をサポートすることにつながるのではないだろうか。

最後に今後の課題について述べる。本研究の対象者は14名と少なく、2カ国に限っていることから、過度な一般化はできない。したがって、今後は対象者数を増やし、量的な調査を行なう等、精査する必要がある。また、対象者である学生が進路の違いによる進路サポートを受けていないと述べたため、進路別の分析は行なわなかったが、今後は進路別、出身国別など詳細な属性に応じた調査、分析を行なう必要がある。さらに、本研究では進路サポート源に注目をしたが、今後は進路選択の際にその他のリソースが学生にどのように活用されているかについても検証が必要であろう。

謝 辞

本論文の執筆に際し、ご指導いただきました加賀美常美代先生、調査にご協力いただきました日本語学校の教職員、学生の皆様に心よりお礼を申し上げます。

注

- (1) 本稿における「教師」とは日本語教師を指す。また、「教職員」とは日本語教師、事務職員等、日本語学校に勤務する者を指す。
- (2) 本稿では大学、専門学校等の学生と区別がつきにくい場合を除き、特別の断りがない限り、「学生」は日本語学校に通う学生を指す。
- (3) 2011年3月の東日本大震災以後、日本に滞在することを単なるモラトリアムであるとする学生は減少したと考えられる。震災後の混乱が続く状況でも日本に滞在し、日本語学校で日本語学習を継続し、進学を目指すことを決めた学生もいることから、今後は学生になぜ日本に滞在し、なぜ日本語を学ぶ必要があるのかということ問うことで、これまでとは異なる進路意識が出てくる可能性がある。本研究は2008年から2009年にかけて行なわれたものであり、この点に関しては取り入れることはできなかったため、今後の課題としたい。
- (4) 「進路選択自己効力」とは進路を選択するために必要な行動を自分がどの程度うまくできるかという個人の確信(富永2008)のことである。

参考文献

- 石隈利紀(1996)「学校心理学に基づく学校カウンセリングとは」『カウンセリング研究』29, pp.226-229.
- 石隈利紀(1999)『学校心理学——教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス——』誠信書房。
- 石隈利紀(2007)日本学校心理学会編『学校心理学ハンドブック』教育出版。
- 市嶋典子・長嶺倫子(2008)「「進学動機の自覚を促す」日本語教育実践の意義——レポート分析とエピソード・インタビューを基に——」『日本語教育論集』24, pp.65-79.
- 伊能裕晃(2004)「日本語学校における就学生支援——必要となる認識、活動、組織についての提言——」『留学生教育』9, pp.169-180.
- 今西一仁(2007)日本学校心理学会編『学校心理学ハンドブック』教育出版。
- 榎本光邦(2007)日本コミュニティ心理学会編『コミュニティ心理学ハンドブック』東京大学出版会。
- 遠藤ゆう子・佐藤正則(2008)「日本語学校での実践——新しいコミュニティを目指して——」『日本語教育はコミュニティ構築を実現できるか』pp.9-14.
- 岡益巳・深田博己(1994)「中国人留学生と就学生の意識」『岡山大学経済学会雑誌』26-1, pp.1-28.
- 奥田純子(2011)「日本語教師のキャリア形成——日本語教育機関の教師へのインタビューを手がかりに——」『異文化間教育』33, pp.60-80.
- 加賀美常美代(1994)「異文化接触における不満の決定因——中国人の就学生の場合——」『異文化間教育』8, pp.117-126.

- 加賀美常美代 (2003) 「多文化社会における教師と外国人学生の葛藤事例の内容分析 — コミュニティ心理学的援助へ向けて —」『コミュニティ心理学研究』7-1, pp. 1-14.
- 亀川順代 (2005) 「日本語学習者の日本語学校と日本語教師に対する意識についての一考察 — メタファーによる分析を通して —」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』5, pp. 89-102.
- 金光美千代・鳥光玲子 (2008) 「進学科の歩みと現況」『日本語教育研究』54, pp. 4-6.
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法 — 創造性開発のために』中央公論社。
- 邱焱・久保隆夫 (2008) 「中国人就学生のサポート源についての検討 — 日本語学校に焦点を当てて —」『留学生教育』13, pp. 51-61.
- 財団法人日本語教育振興協会 (2010) 『平成 22 年度日本語教育機関実態調査』。
- 富永美佐子 (2008) 「進路選択能力および進路選択自己効力が進路選択行動に与える影響 — 高校生・大学生の発達差の検討 —」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』東北大学 56-2, pp. 163-176.
- 中井好男 (2009) 「中国人就学生の学習動機の変化のプロセスとそれに関わる要因」『阪大日本語研究』21, pp. 151-181.
- 萩原秀樹・高井貞美 (2011) 「学習者の「生」(ライフ)に迫るための日本語活動 — ライフキャリアシラバスと情意シラバスの定期と融合 —」『平成 23 年度日本語学校教育研究大会予稿集』pp. 69-72.
- 範玉梅 (2005) 「日本語学校における一人っ子の中国人留学生増加に伴う問題」『阪大日本語研究』17, pp. 59-90.
- 村越彩 (2011) 「日本語学校に通う学生の進路選択自己効力に影響を及ぼす進路サポート — 中国人学生と韓国学生の特徴 —」『異文化間教育』34, pp. 75-89.
- 山田陽子 (2008) 「中国人就学生の生活世界と日本語教育 — 名古屋市の就学生を事例に —」『名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究』10, pp. 263-275.